

松本大夢（ヒロム）22歳、大学4年生。京都府出身、現在都内在住。
家族構成は父:義信（当時31歳）と母:舞（当時27歳）との間に生まれる。ひとりっ子。
義信は奈良で林業を経営する家に生まれ、
兄（長男）が大学教授、弟（三男）が父の会社を継ぎ、義信は京都で小さな中華料理店を営んでいる。
舞は京都の文房具屋の家に生まれ、姉が今は継いでいる。
義信はもともとは画家を目指していて美大に進学し院生となり、
教授の授業の手伝いをしていたときに舞と知り合い付き合うようになる。
舞が大学を卒業してからは親の許可を得て同棲をする。
画家の活動は個展を開くなどしていたが鳴かず飛ばずの状態が続き、
舞は医療事務として働き義信を支えた。
30歳目前で義信は画家としての活動に区切りをつけ、
知り合いが飲食店をたたむというタイミングで得意な料理を活かして中華料理店をオープンさせる。
翌年には舞が望んでいた子どもも授かりヒロムが生まれる。
義信はヒロムに対して積極的に関わり、深い愛情もあったが厳しくも関わった。
行き過ぎたときは舞が止めることもあった。
幼少期のヒロムにとって義信は最も怖い存在であり、最も信頼できる存在でもあった。
一方、舞に対してはとことん甘えた。
ヒロムは絵を描くことや昆虫採集などに興味があったが、
見た目が女の子っぽいこともあって近所のお姉さんたちに可愛がられ、
ゲームをしたりおまごとをしたりするようになると、
義信は「男らしさ」を求め運動をさせようとする。
小児喘息や副鼻腔炎、アトピー性皮膚炎など抱えるヒロムには体質的にきつかったが、
サッカーだけは体質のハンディキャップ以上に熱中できた。
サッカー少年になってからは、チームメイトと遊ぶことが増え、活発になり、義信も口を出すことはほとんど
なかった。
義信の影響もあって、正義感が強く、困っている人には自分から声をかけたり、
学級委員にも自ら立候補するようになる。
クラスの中心人物として常に男友だちに囲まれて女子からは憧れる存在となった。
また、誰からも勉強をしろと言われたわけではないが常に成績も学年でトップ5に入り、
学業とサッカーとの両立をこなしていた。
中学受験を義信に希望して私立の男子校に受験し見事に合格。
しかし、中学に上がってから状況が一変する。
最初は社交性もありクラスメイトと友だちになっていくが、
夏の暑い日にある生徒（井川）がいじめにあってることに気づき止めに入る。
加害者数人に「恥ずかしくないのか？」など詰め寄る。
すると、次の日からは自分がいじめのターゲットにされる。
この頃のヒロムは義信の影響から卑劣なことに対する反発心は強く、サッカーで鍛えた身体もあって相手に向
かって行ったが大人数から囲われてしまう。
その中には、仲良くなった友だちやいじめの被害者だった井川までいた。
そのことがヒロムを激しく傷つけた。
いじめのターゲットになり、最初は抵抗していたが毎日執拗に被害に遭うことで抵抗できなくなってきた。
自分の教科書に「死ね」など落書きされたり、
上履きを捨てられたり、
休み時間にみんなから机を蹴られたり、
手で「キモい」など言わながら何度も押されたり、
掃除用具がしまってあるロッカーに閉じ込められたり…
遠巻きに見守る他のクラスメイトもヒロムに関わらない。
教師に相談することも一瞬考えたがかえってひどくなる想像しかできないし、
なによりも親に知られることが一番嫌だった。
部活動のサッカー部も休みがちになり放課後顧問からも聞かれることがあったが口を閉ざした。
なぜ自分がこんな状況に陥ったのか理由探しをするようになり、いじめを止めたこと以外にもいろん理由を探
した。

そうしているうちに、自分の性格が悪いからとか正義漢ぶっていたからとかどんどん自己否定をしていく。自分の存在がなくなった方がいいのではないかと本気で考えるようになっていく。

すると、朝起きても身体が動かない日が増えてきた。

最初は風邪と言って誤魔化したが、自宅兼お店の構造上、義信が訝しむため何度もこの手は通用しない。

仕方なく重い身体を起こして商店街などで時間を潰すようになった。

しかし、それも学校からの連絡が来たことによって義信にバレてしまう。

帰宅したヒロムに問い合わせた義信だがヒロムは本当のことが言えないため黙るだけ。

最初こそ冷静だった義信も次第に語気が強くなり責めだす。

舞が止めるも振り払ってヒロムの頬を叩く。

家も居場所じゃなくなった感覚になりヒロムは塞ぎ込んでしまう。

次の日から完全に朝起きれなくなり、義信が引っ張り出して起こしてもすぐに床に突っ伏してしまう。

そこから不登校となる。

舞は不登校の本を読み漁ったり、カウンセリングを受けたりするが、

義信は本心は一番心配しているものの情けないと酒に走った。

ヒロム自身は「消えたい」という願望が日増しに強くなる。

ネットで死ぬことやいじめのことばかり検索するようになった2ヶ月後、

今は被害を受けてないのになぜ頭の中でこんなにも考え苦しんでいるんだと思う機会が増えはじめる。

そもそも、いじめを受けた自分が非を探しているが、

いじめたやつらは今ものうのうと笑って過ごしていると考えるとだんだん腹が立ってくるようになる。

怒りのエネルギーが自分から外に向きはじめる。

ネット上でよく目についた「被害者に責任はない」という言葉がようやく自分の中に入ってきた。

「復讐したい…」そんな声が自分の中から聞こえた感覚になった。

この頃から独り言が増えていった。

この独り言は解離性同一性障害などではなく意識的な独り言である。

内省的であり、発散的なものでもあった。

いじめたやつらにどうやって復讐するか…そんなことを想像するようになっていた。

不思議とそう思うとエネルギーが湧いてくるような感覚になり身体も動くようになってきた。

復讐するにしろ、しないにしろ、準備だけはしておこうと思い計画を練った。

しかし、そうなるとちらつくのは両親の存在で自分が復讐を決行した後の2人の表情がヒロムをまた苦しめた。

そんなことを考えていた折にあまり会話をしたことのないクラスメイトの青野から連絡がくる。

もういじめのターゲットは別の人へ変わったから学校に来ても大丈夫だというのだ。

青野は傍観していたグループだったと思うが罪悪感を感じていたのか？それともなにか裏があるのか？

いずれにしろ、このまま不登校でいるつもりもないし、復讐をするにしても学校に行かないことにはできないと思いつつ制服のポケットにカッターを忍ばせて翌週登校することを決める。

両親には、なにもなかったかのように回復したと振る舞った。

義信がどんな反応をするか気になったが冷静なように見せて嬉しそうだった。

当日、カッターを忍ばせ登校すると校門のあたりであまりに強い動悸と吐き気に襲われ、たじろいだが時間をかけて落ち着きを取り戻した。

教室に入るとみんな一瞬をこちらを見るがすぐに視線を逸らす。

無視に近い状態だったがその状況を受けかえって安心できた。

青野だけが視線を合わせ笑みを送ってくれた。

教師も体調は良くなかったかぐらいでいつもの調子に戻る。

それでも、周りの視線はどうしても気になるし、考えてしまうとやはり身体は反応して動悸や手汗はかく。

休み時間に自分のときほどではないがいじめられている生徒がいた。

からかわれたり臀部を蹴られたりしている。

その光景を見て安堵感を感じたと同時にそんな自分が嫌になった。

ひとつわかったのは、いじめをすることによってやつらは連帯感を感じている。

標的にあきたらまた変わりの人間を探し、標的になりたくなければ仲間になるしかない。

だから人数が増える。

こんな幼稚なことで自分を守っているのかと呆れた。

その後、標的がヒロムになることはなかったがカッターはポケットに常に装備していたし、

視線が気になるとカッターを握ってやり過ごした。
いじめられている人を見てフラッシュバックのように自分が受けたいじめを思い出すこともあったし、
いじめたやつらひとりひとりに復讐する想像は結局卒業するまで続いた。
中学時代はいじめを受けた期間としては1ヶ月弱だがこの体験がヒロムのこれから的人生に大きな影響を与えた。
高校はクラスメイトが誰もいかないような遠く偏差値も中程度の高校を選んだ。
義信もヒロムにその高校を選んだ理由を聞いたがあまり突っ込んだりはしなくなっていた。
高校に上がってからは、
「人に不快な思いさせてないか？」
「自分は出過ぎてないか？」
と目立たないように過ごした。
よく外にいるときは無意識に独り言も出ていたが意識して止めるように注意した。
視線に対する恐怖心は続いており、他者とずっと目を合わせていられないし、
授業中に当たられると周りの目が気になって声が震えたり胸が詰まる感覚に襲われた。
こうした影響はいじめを受けたからだと紐付き復讐心を煽った。
友人関係は表層的な会話、愛想笑いが多く、なにかあるとすぐ謝ることが癖になっていた。
距離感は常に少し遠めで親友と呼べる友人はいなかった。
みんなと満遍なく、当たり障りなく関わった。
恋愛関係は外見がいいこともあって告白されたりすることもあり、
最初は断っていたが学年が上がるにつれて周りが付き合いだすと目立たないようにヒロムも一学年下のひとりの女子生徒と付き合った。
しかし、異性であっても相手が自分に対してどう思っているかと過度に気になり表層的にしか関われない。
性行為のときも相手の反応ばかり気にして途中で萎えてしまう。
自分は女性と普通の恋愛ができないんだと思うようになった。
これらもみんないじめの影響だと紐付き復讐心を煽った。
そうした影響下から脱却するために東京の大学に進学することを決める。
自分のことをまったく知らない人たちと一緒に関係性を築くために上京。
大学は高校までとは違い閉鎖的な空間ではなく、人間関係もたんぱくに過ごしやすかった。
あたり触りなくいい人といった印象を心掛けてサークルやアルバイトもこなしていった。
しかし、一人暮らしもあってから独り言が加速する。
テレビを見ているときはもちろん、ふとした瞬間に出てしまい人に聞かれることもあった。
そのため、ひとりでいるときが一番落ち着いた。
一体、なんのためにここまで人間関係を気にして生きていかなければならないのか？
それもこれも、やはり中学時代のいじめの影響ではないか？
やつらに復讐することではじめて自分の人生が再スタートするのではないか？
そんなことを想像していくと不思議と生活にハリが出てくる。
同窓会でも主催してやつらに復讐してやろうか…
大学4年になりいまだ就活する気にならずにいた。